

# 国語科授業案

日時 平成21年10月23日(金)11:05～

生徒 2年C組 男子22名 女子17名

授業者 太田 諭

授業場 3年C組教室

## 1 単元名 「武士の生き様を読み取ろう」 ～中心教材「平家物語」～

### 2 単元の目標

『平家物語』の「扇の的」「敦盛の最後」を扱うことを通して、古典の歴史的仮名遣いを適切に現代仮名遣いに直して読む力の定着を図るとともに、登場人物の言動から、その思いや武士の生き様を読み取ることができるようにする。加えて「あらすじ」「入道死去」を扱うことを通して、『平家物語』の全体像を捉えさせることで、生徒の『平家物語』に対する興味・関心を高める。

### 3 単元について

#### (1) 教材観

小学校では平成23年度から、中学校では平成24年度から完全実施される新学習指導要領では、新たに〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕が設定された。

小学校段階から「話すこと・聞くこと」「書くこと」及び「読むこと」の指導を通して、古典に関する事項について指導することとしている。それを受けて中学校1年生では、「文語のきまりや訓読の仕方を知り、古文や漢文を音読して、古典特有のリズムを味わいながら、古典の世界に触れること。」「古典には様々な種類の作品があることを知ること。」2年生では、「作品の特徴を生かして朗読するなどして、古典の世界を楽しむこと。」「古典に表れたものの見方や考え方に触れ、登場人物や作者の思いなどを想像すること。」3年生では、「歴史的背景などに注意して古典を読み、その世界に親しむこと。」「古典の一節を引用するなどして、古典に関する簡単な文章を書くこと。」を指導することとなる。これは、児童生徒に、伝統的な言語文化の継承者としての資質・能力を培うことをねらいの一つとしている。つまり、古典を読む技能と古典に親しむ態度を発達段階に応じて育成することが求められているのである。

もちろんこれまでも国語科として古典指導は行われていたが、新学習指導要領では古典についてこれまでよりも踏み込んだ内容となっていることがわかる。

教育出版『伝え合う言葉』に所収されている『平家物語』は、「祇園精舎」「扇の的」「敦盛の最期」から構成されている。これは、中学校段階において『平家物語』を扱う上で、非常に工夫された構成と言える。まず、「扇の的」「敦盛の最期」が、一話完結的な要素の高い章段であることである。中学校段階において、非常に長い『平家物語』全体を扱うことは難しく、一部を扱わざるを得ない現状を考えると、これは重要なことと言えよう。しかし、一部であるがゆえに、これらの章段から『平家物語』の全体像をつかむことは極めて難しい。

#### (2) 生徒観

省略

#### (3) 指導観

以上のことを踏まえ、本単元においては、古典を読む技能の定着を図ることはもちろんであるが、生徒の古典に対する学習意欲を高めることに重点を置いた指導をしたいと考える。

まず、古典を読む技能の定着を図るための手立てであるが、音読の技能を高めるために、仮名遣いの変換が必要な個所を太字にすることで、読む際に注意が向くようにする。また、口語訳の技能の定着を図るためには、穴埋め式問題から長文を書く問題へと移行するよう単元の中における難易度を考慮する。さらに、脚注の数の工夫やヒントの提示を行う。重ねて古語辞典を配付し、自分で必要に応じて意味調べをする必要性に気付かせたい。

次に、古典に対する学習意欲を高めるための手立てであるが、登場人物の言動から武士の生き様を

読み取り、登場人物の一人に視点を当て、その生き方について自分と比較した感想を交流する言語活動を単元末に導入する。さらに、本校の研究にもある通り、「教科のよさ」の実感へ導く指導を心がけたい。本校国語科では、「国語のよさ」を今年度の研究主題である『言葉のはたらきに気付く楽しさ』と捉えている。本単元の授業においても、古典における「言葉のはたらきに気付く楽しさ」の実感へ導けるような授業を構築する。「言葉のはたらきに気付く楽しさ」の実感へ導くために、次の手立てを講じる。

A 教材提示（課題設定）の工夫

B 「言葉のはたらき」に気付きやすい教材の開発

まず、本単元における教材提示の工夫としては、「扇的」「敦盛の最期」の続きを予想させ、提示する手法を取る。教育出版教科書所収の「扇的」は、与一が見事矢的を射て、敵味方共に感心する場面で終わっている。だが、実際にはその後感動して船上で舞を舞った平家の老兵を、義経の命により与一が射殺す場面がある。武士の生き様を考えさせる上では、この場面の提示が効果的であろうと考える。「敦盛の最期」については、直実が敦盛を心ならずも自らの手にかかる場面で終わっているが、その後の、直実が出家の思いを強くする場면을提示することで、直実の心情をより深く理解することができると思う。それらの場면을提示するのである。

次に、教材開発に関わっては、「あらすじ」の教材化により、『平家物語』の全体像を把握しやすくする。また、「入道死去」の場면을教材化する「入道死去」の場面は、非常に極端な表現がされており、清盛の悪行の報いであることを予想させるものとなっている。この場面は、生徒にとって予想外であり、文章も比較的平易であるため、関心・意欲を高める上で効果的であろうと判断した。

#### 4 単元の評価規準

関心・意欲・態度	読むこと	伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項
㊦『平家物語』の学習に対して意欲的に取り組もうとする。 ㊧『平家物語』の学習を通して、『平家物語』そのもの及び古典を積極的に学ぼうとする。	㊦登場人物の言動の意味をとらえることができる。 ㊧『平家物語』に表れている武士の生き方や考え方について、現在の自分と比較して自分の考えをもつことができる。	㊦古典の歴史的仮名遣いを適切に現代仮名遣いに直して読むことができる。 ㊧『平家物語』の登場人物の言動からその思いを想像することができる。

#### 5 単元と研究との関わり

(1) 行動傾向の改善にむけて

本実践は、前述した行動傾向1及び3の数値の改善を目指したものである。

(2) 教科のよさの実感へ導く手立て

前述したように、本実践における「国語のよさの実感へと導く手立て」は次の2点である。

A 教材提示（課題設定）の工夫

B 「言葉のはたらき」に気付きやすい教材の開発

本校国語科で定義した「国語のよさ」である「言葉のはたらきに気付く楽しさ」であるが、古典を扱う際には、文語であるがゆえに言葉のはたらきに気付きにくい側面があり、当然その楽しさの実感も難しくなる。それを解消するためには、読む技能を高めることも必要ではあるが、まず教材提示（課題設定）の工夫をすることが効果的であろうと考えた。例えば、続きの提示により、展開の妙を実感することが可能になるのである。次に、教材開発についてであるが、生徒が関心を寄せると考えられる場面の教材化や、生徒にとって身近である（例えば昔話など）古典作品の教材化が考えられる。生徒が感心を寄せると考えられる場面は、描写や展開に工夫が凝らされ、いわゆる優れた場面であることが多い。これは、言葉が有効にはたらいっている場面であると言い換えることもできる。また、生徒にとって身近であるということは、文語というハードルが下がり、展開が容易に予測できるといえ

る。そうすることで、「言葉のはたらきに気付く楽しさ」を実感することができるであろうと考えた。

## 6 単元計画（全6時間）

時	学 習 事 項	主な学習活動・ <b>手立て</b>	評 価		
			関	読	伝
1	●『平家物語』の概略を知り、興味を持つ。	○『平家物語』について現時点で自分が知っていることを発表する。※関連「耳なし芳一」の話 ○『平家物語』に関わる歴史的な事実を、社会科の学習から想起する。 ○ビデオ「平家物語の世界」を視聴する。 ○『平家物語』のあらすじを読み、概略を知る。 <b>B</b> ○「祇園精舎」を読み、諸行無常の考え方を知る。	ア		
2 本時	●「入道死去」の一部を読み、清盛の死がどのように描かれているのかを捉えるとともに、なぜこのような描かれ方をしたのか考える。	○『平家物語』のあらすじから、清盛の死に関する記述を探す。 ○清盛の死がどのように描かれているか予想する。 <b>B</b> ○「入道死去」の一部を読み、清盛の死がどのように描かれているかを捉える。 <b>B</b> ○清盛の死がなぜそのような描かれたのか考える。	イ	イ	ア
3 4	●「敦盛の最期」を読み、内容を捉えるとともに、武士の生き方について考える。	○「敦盛の最期」を読み、登場人物・展開を捉える。 ○敦盛がなぜ直実に名乗らなかったのかを考える。 ○直実・敦盛の武士としての生き様について考える。 ○直実がその後どんなことを願ったのか予想する。 <b>A</b>	イ	ア イ	イ
5 6	●「扇の的」を読み、内容を捉えるとともに、武士の生き方について考える。	○「扇の的」を読み、登場人物・展開を捉える。 ○矢を射る前の与一の気持ちを想像する。 ○与一の武士としての生き様について考える。 ○その後、平家の老兵が船上で舞を舞った後の展開を予想する。 <b>A</b> ○現在の自分の生活と当時の武士の生活を比較し、自分の考えを持つ。 ○自分の考えを交流する。	イ	ア イ	イ

## 7 本時案（2／6時間目）

### (1) 本時の目標

『平家物語』の「あらすじ」「入道死去」の学習を通して、『平家物語』の全体像を捉えることで、『平家物語』に対する興味・関心が高まるとともに、歴史的仮名遣いを変換することができる。

### (2) 本時の展開

(○…発問, △…補助発問, □…指示・説明)

学習活動（下位目標）	主な働きかけ・ <b>手立て</b> ・【評価方法】	備 考
1 『平家物語』の「あらすじ」を読み、「清盛が異様な死を遂げた」ことをワークシートに記入することができる。	○あらすじでは、清盛はどんな死を遂げたかと書かれていますか。 <b>手立て B</b> [ワークシート]	ワークシート配布
「清盛の最期」を読み取ろう。		
2 清盛がどのような死を遂げたかについて、自分なりに予想し、ワークシートに記入する。	○『平家物語』では、清盛はどのような死を遂げたかと書かれていますか。	一斉

に記入することができる。

- ・重い病気になった。
- ・自殺した。
- ・誰かに暗殺された。
- ・崇りにあった。等

- 3 「入道死去」の一部を正確に音読することができる。
- 4 「入道死去」の一部から、死に瀕した清盛がどのような状態あるかを読み取り、ワークシートの( )に記入することができる。
- 5 記入した言葉を班で交流することで、より適切な言葉を書き入れることができる。
- 6 清盛の死が過酷な描かれ方をしている理由について、因果応報の視点から考え、記述することができる。
- 7 指名された場合、班で考えた意見を発表することができる。
- 8 「あらすじ」から、清盛の死後、平家の勢いが急速に衰えていくことを指摘することができる。

[ワークシート]

入道相国、やまひつき給ひし日よりして、水をだにのどへも入給はず。身の内のあつき事、火をたくが如し。ふしたまへる所四五間が内へ入ものは、あつさたへがたし。ただのたまふ事とは、「あた、あた」とばかりなり。すこしもただ事とは見えざりけり。

比叡山より千手井の水をくみくだし、石の舟にたたへて、それにおりてひえたまへば、水おびたしくわきあがりて、程なく湯にぞなりにける。もしやたすかりたまふと、笥の水をまかせたれば、石やくろがねなどのやけたるやうに水ほとぼしりて、よりつかず。おのづからあたる水は、ほむらとなりてもえければ、くろけぶり殿中にみちみちて、炎うづまいてあがりけり。

四五間・・7. 2メートル～九メートルぐらい

- 「入道死去」を音読してみましょう。
- 手立てB** [観察]
- 清盛はどのような状態でしょうか。口語訳の( )に適切な言葉を入れてみましょう。 [ワークシート]
- ( )にどのような言葉を入れたか、班で交流してみましょう。 [観察]
- 『平家物語』で清盛の死がこのような描かれ方をされているのはなぜでしょう。班で考えてみましょう。 [ワークシート]
- 班で考えた意見を発表してみましょう。 [発表]
- この清盛の死後、平家の勢いはどうなっていますか。 [発表]

個人・ペア

期待される行動傾向  
(情報)  
脚注だけでなく辞書を引き内容を読み取るようとしている。

期待される行動傾向  
(情報)  
班の全員の意見をメモにとろうとしている。

班・班長を司会とし、班長の隣から発表。